

人間性教育における体育系部活動の位置づけ

上野 哲^{*1}

Humanistic education and athletic club activities

Tetsu UENO

If club activities in technical colleges in Japan are not the means of health maintenance and physical strength improvement but a part of humanistic education, the role of the coach has to be different from the role of a coach of a private sport club. In technical colleges in Japan coaches are asked to play a role that educates teenagers to become adults who are cooperative, sociabile, altruistic, making effort, and provide leadership through the coaching to train good athletes. By using questionnaires for soccer club students, we discuss how the advising teachers in club activities in technical college actually do play this role.

KEYWORDS : humanistic education, athletic club activity, soccer

1. はじめに

本校の教育に関する基本理念は「技術者である前に人間であれ」である。この理念が意味するものは、公式の英訳を見ればより明確になる。すなわち、「Be an engineer with good human mind (善き人間性をもった技術者であれ)」¹⁾あるいは「Become an engineer with a sound and proper human attitude (健全で礼節ある人間としての姿勢を身につけた技術者になれ)」²⁾である。このように、本校では創立以来、豊かな人間性を育むことを教育の重要な根幹に据えている。この人間性教育は授業やホームルーム活動、学校行事はもちろん、部活動などの課外活動を通しても行われるべきものである。

特に体育系の部活動を単なる健康維持や体力向上の手段ではなく人間性教育の一環として位置づけた場合、指導者には民間のスポーツクラブのインストラクターとは異なる役割が求められることになる。具体的には「競技力向上に向けた指導

を利用しながら、10代後半の若者を『社会性や協調性があり、適切に他者尊重でき、自分の能力を伸ばす努力も怠らず、仲間をまとめてリーダーとして決断できる大人』に育てていく役割」が求められる。

本稿は、高専の体育系部活動の指導者がどのようにすればこの役割を効果的に果たせるかに関する、サッカー部顧問としての筆者の実体験に基づく実践報告及び考察である。

以下ではまず、2015年1月及び2017年1月に実施したサッカー部員に対するアンケート結果をもとに、部活動での指導が人間性教育の一環として一定の機能を果たしていることを確認する。そのうえで、サッカー部における指導の現状を取りあげ、部活動での指導が人間性教育の一助を担うためには、指導者としての責任感と義務感が不可欠になることを論じる。最後に、その責任と義務がアマチュア指導者である高専教員にどこまで求められるべきなのかについて、私見を展開する。

*1 一般科(Dept. of General Education), E-mail: tueno@oyama-ct.ac.jp

2. サッカー一部員を対象にしたアンケート調査

アンケートは「部活動と学業の両立」「部活動が人間性教育に与える影響」「指導者のあるべき姿」等に関する9項目から構成されている。全く同じ内容のアンケートを2015年1月及び2017年1月の2度に渡り実施した。第1回目の2015年1月の実施時には全部員21名(4年生:4名、3年生:8名、2年生:6名、1年生:3名)に協力を依頼し、15名(71%)の回答を得た。また第2回目の2017年1月の実施時には、第1回目に協力してくれた当時の1~2年生(第2回目実施時3~4年生)を除き、低学年生(1~2年生)8名のみを協力を依頼し、8名全員(100%)の回答を得た。なお2回とも、協力を依頼した部員の中に女子マネージャーも含まれている。

3. 調査内容及び結果

3. 1 サッカー一部に入ってよかったと思うか

この問いに対しては「思う」という回答が100%をしめた。具体的な理由として「人間として成長できる」「最高の仲間に出会えた」「友達の幅が広がった」「楽しい」「サッカーを通していろいろ学ぶことができた」「学校に来るのが以前より楽しくなった」があげられている。

3. 2 部活は学業に悪影響を及ぼしているか

この問いに対しては「及ぼしていない」という回答が100%をしめた。また「クラスでの成績順位」に関しては「1~10位」47%、「11~20位」27%、「21~30位」26%、「31位~」0%となっている。

3. 3 サッカー一部での活動が将来「まともな社会人」となるために役立っている(役立つそう)と思うか

この問いに対しては「役立っている」という回答が94%を、無回答が6%をしめた。

「役立っている」ことの具体的な理由として「サッカーは基本的にチームプレーであり、個人だけでなく全体のことも考えて行動するため、その考え方が将来役に立つ」「まともなことを教えてく

れる先生がいるから」「挨拶や言葉遣い、上下関係など、社会で必要になるであろうことが学べる」「自分の実力が客観的にわかる」「サッカーの技術だけでなく、自分たちでチームを作っていくという責任やコミュニケーション能力も養っていけると思うから」「何事にも諦めずに取り組める姿勢が身につく」「ミーティングで自分の意見を発する機会が多いので、自分の意見を相手に伝えたりする能力を多少は上げることができると思う」「学校外の人や他学年とも交流でき、異なる考え方を知って受け入れられる」「社会人と試合をしたりして社会勉強になる」があげられている。

3. 4 親子サッカー教室での子どもたちの指導は人間としてのあなた自身の成長に少しでもつながっていると思うか

この問いに対しては、「成長につながっている」という回答が94%を、無回答が6%をしめた。

「役立っている」ことの具体的な理由として「人に何かを教えれば普段とは別の視点から物事を見られるため、違う何かを学ぶことにつながる」「地域社会への貢献になっている」「サッカーを通じて子どもとの接し方を学べる」「どうやって指導したらよいかなど、相手のことを考えて行動するから」「コミュニケーション能力がつく」「子どもと接することで大人になれる」「いかにわかりやすく伝えられるかが問われるので、考えて行動できるようになる」「普段は自分の目線でのみ考えているが、小さい子の目線で考えなくてはならなくなったり、客観的な見方をしなければならなくなる」「周りの家庭が普段からどのような子育てをしていて、その結果が子どもにどのように現れているか見ることができた」「小さい子に教えると、わかりやすい言葉で相手のほうを見ながら教えないと伝わらないので、誰にでもわかりやすく説明できるようになる」があげられている。

3. 5 部活の顧問から生活面や成績について注意されるのは嫌か

この問いに対しては「いやだ」という回答が5%を、「何とも思わない」という回答が89%を、「嬉しい」という回答が5%をしめた。

「何とも思わない」ことの具体的な理由として「注意してもらうことで自分がよい方向に変われ

るきっかけになると思うのでありがたい」「生活面で注意されるのは自分が悪いわけだから、逆に注意してくれる人がいることに感謝するし、学生のうちになおせるならなおしたいから」「先生から注意を受けるようなことをしている自分が悪いと思うから」「いやだと思うのなら、それは努力不足で自分のせいだから、次にもっと努力すべき」「なんだかんだいっても（顧問のことを）いい人だと思っているから。部活動に力を注いでくれているから」「そのような指導があるからこそ部活をする意味がある」が、また「嫌だ」と思うことの具体的理由として「干渉しないでほしい」が、さらに「嬉しい」と思うことの具体的理由として「自分でも気づかないところを言ってくれたりする。人間として成長できる」があげられている。

3.6 ジダン（1998年フランスワールドカップ優勝時主将、現リアル・マドリード監督）のような有名選手が監督を引き受けてくれて厳しい練習を課せられてもついていくか

この問いに対しては「ついていかない」という回答が61%を、「ついていく」という回答が22%を、「わからない」という回答が17%をしめた。

「ついていかない」ことの具体的理由として、「そこまでしてやりたくない」「高専に入った時からサッカーだけでなく勉強とそれ以外のことに力を注ごうと思っていたから」「うまくなると思うけど、さすがに生活面に支障が出る」「身体がもたない。そこまでして勝ちたいとは思わない」「サッカーは強いられるものではない」「サッカーで勝つためだけに部活に参加しているわけではないので」「プロになりたくてサッカーがやりたいという人はそもそも高専に来ていないと思うから」が、また「ついていく」の理由として「勝つためには辛いこともやっていかないといけないと思うから」「世界で活躍していた素晴らしい人に教えていただけること自体夢のようだから」「うまくなりたいたいから」「自分の成長につながるので辛くても頑張っていく」があげられている。

3.7 あなたが将来結婚して子どもができ、その子がサッカーを始めたとしたら、“サッカー選手として絶対やってはいけないこと”として何を教えるか

この問いに対しては、以下の回答が得られた。「練習をさぼる」「感謝しない」「物を大切にしない」「人としてやってはいけないことをする」「仲間をけなす」「天狗になる」「相手を馬鹿にする」「試合中や練習中に仲間のミスを責める」「足を凶器にする」「暴言をはく」「口だけ達者な人になる」「女遊びをする」「仲間や相手のプレーを非難する」「アンフェアなプレーをする」「手を抜く、投げ出す」「自己中心的なプレーをする」「挨拶をしない」「マナーが悪い」「ラフプレーをする」。

3.8 サッカー一部の指導は教員がやったほうがよいと思うか。それとも外部指導者に任せられたほうがよいと思うか

この問いに対しては、「教員のほうがよい」という回答が83%を、「どちらでもよい」という回答が17%を、「外部指導者のほうがよい」という回答は皆無であった。

「教員のほうがよい」ことの具体的理由として、「すぐ近くにいる」「部活動時に学校での生活や勉強について気軽に相談できるから」「学生の日頃の行いを見てくれているから」「一番身近であるから」「普段からかかわりがあるという点で、指導者との距離ができないから」「学校の勉強と成績、生活面がちゃんとしていて部活ができると思うので、それらの指導もしてもらえるから」「身近だし、やりやすい」「今の状態が最もよいチーム状態だと思うので」「教員だから学校に関することも心配してくれる」「教員にしかわからない学生の顔があったりするから」「中学時代の部活は外部指導者だったが、プレーの相談もしづらかったし、コミュニケーションも取りづらかった」「今のチームをもし外部の人が指導したら、あわない気がする」「今は主将がだいたいをまとめているので、外部の人は不要」があげられる。

4. 考察及び結論

3.1からは、サッカー部に入ることの大きな魅力として部員は「楽しさ」「幅広い仲間・友達の獲得」をメインに感じていることが推察できる。

さらに3.2からは、部員の約半数がクラスの上位4分の1以内にいることがわかる。私が監督を務めてからこれまで留年した部員は1名いるが、

概ね部員は聡明で戦術の理解度や修正能力が高いと感じている。

3.3からは、集団競技というサッカーの性質上、仲間と良好な関係を築くための工夫や利他心、何事にも最後まで諦めない姿勢や、自律心や民主的な組織運営の方法論構築などが身につくと部員自身が考えていることがわかる。

3.4の結果を見ると、自分自身でサッカーを楽しむだけでなく、子どもたちにサッカーの楽しさを感じてもらおう活動を「面倒臭い」ととらえるのではなく、自分の考え方は異なる他者の見解を尊重する姿勢や、目的を達成するために相手にとって最もよい方法を用いて接する姿勢が身につく、結果的に自分自身が選手としてプレーする時に役立っていると部員が考えていると理解できる。

3.5については、多くの部員は、サッカーには関係のない成績に関することで、しかも自分の耳に痛いことを顧問教員に言われても、「自分のために言ってくれている」と真摯に受け止める余裕ももっていると考えられる。

3.6からは、小山高専のサッカー部には多様な目的をもった部員が集まっており、勝ちたいという思いがある一方で、勝利のために全てを捧げることに価値を見いださない部員も少なからず居ることが伺える。

また3.7からは、部員の多くが「サッカー選手としてやってはいけないこと」と「人としてやってはいけないこと／人としてまともであること」を同義に考えていることが推測できる。

最後に3.8を見ると、外部指導者ではダメだという積極的な理由はない一方で、民間のクラブチームとは異なり、当該スポーツの指導だけではなく、学校生活全般を含めた相談や話ができる指導者像を部活の顧問に期待していることが読み取れる。

以上のことより、少なくとも現状のサッカー部においては、競技力向上に向けた指導を利用して「社会性や協調性を養い、適切に他者尊重することを試み、自分の能力を伸ばす努力をしながら、チームという組織を活性化させるために試行錯誤する」ことを自立的に部員に行わせる環境がほぼ整っているといえるだろう。

ただ、この環境は、部活の運営を学生に丸投げして完全に自主性に任せるだけでは十分に整わない。高専生といえども「大人」の密接な関わりが不可欠になるというのが私見である。

以下では、サッカー部で上述の環境がなぜ整えられたかについての背景を述べたい。

5. 小山高専サッカー部の状況

筆者が監督を引き継いだのは2011年8月である。監督を引き継いでからチームの戦術を組織的なものに変えたため、自由な（自分がやりたいことを好きにやれる）サッカーができなくなったことに嫌気がさしたキャプテンや上級生が部活を辞めるという事態に直面した。チーム全体の雰囲気も悪く、無気力が蔓延し、当時所属していた栃木県大学リーグでは2桁の失点をして惨敗したりしていた。次第に筆者が設定した練習メニューにも反発するようになり、ついに堪忍袋の緒が切れた筆者は廃部宣言をした。これに反発した3年生の選手達が監督抜きで自主的・自立的にチーム運営を始め、練習メニューを考え、練習試合の相手を探すようになった。これ以来、サッカー部はキャプテンが練習メニューを体系的に考え、日々の練習を取り仕切り、試合のメンバーを決める、という重責を担うようになった。監督の役割はキャプテンを「指導者」に育て、サポートし、キャプテンが対応しきれない部分のチームコントロールをさりげなくやることになった。

部員は監督にサッカーを「やらされている」のではなく「責任をもって自発的にやっている」ので、監督としての筆者の役割は必然的に「見守る」「任せる」ことが多くなった。任せて、考えさせ、その判断を肯定的に認めて、見守り、励ましていると、部員は次第に自分自身とチームメイトを信頼するようになる。今では選手は試合中に不都合が起こっても、ベンチの監督を頼ることはない。ピッチの中で自分たちで話し合いながら常に修正を試みている。

こうしたスタイルのチーム運営にしてから5年経つが、その間3回の全国高専サッカー選手権大会出場（うち2回はベスト8）、1回の関東高専サッカー選手権大会優勝（14年ぶり）、1回の県社会人リーグ3部優勝など、結果も伴うようになった。

現在部員は26名（うち2名は女子マネージャー）で、木曜日を除く放課後に2～3時間の練習を行っている。部員は全員女子マネージャーも含め、日本サッカー協会公認キッズリーダー資格や公認D級コーチ資格を持ち、年2回実施している親子サ

サッカー教室での指導に積極的に関わっている。また女子マネージャーを含む全員が4級（または3級）審判員資格をもち、紅白戦や練習試合、公式戦（所属している栃木県社会人サッカー3部県南リーグ）で審判を担当している。

部員の平均身長は171cm、平均体重は61kgと身体能力は高くないにもかかわらず、普段は大柄な社会人を相手にプレーしなければならないため、接触プレーが少ない「パスをこまめに回して空いたスペースを利用し、スピードと連係による攻撃と、全体で連動する守備」をチームスタイルとしている。

筆者は毎日グラウンドに出て部員と一緒に過ごしている。その時間は1年間で900時間弱に及ぶ。

6. 指導者としての筆者自身について

筆者の専門は倫理学であり、本校でも「倫理・社会」や「哲学」「技術者倫理」の科目を担当している。サッカーの競技歴は通算32年（小山高専にも監督兼選手として、出場記録は練習試合のみで公式戦出場は未だゼロだが正式に選手登録している）、指導歴は18年（広島県国体（少年）地区選抜コーチなどを含む）に及ぶ。

指導資格に関しては、公益財団法人日本サッカー協会（以下JFA）公認フットサルB級コーチ資格（日本で登録されているフットサル指導者の8%）、公認サッカーC級／ゴールキーパーC級コーチ資格を、審判に関してはサッカー2級審判員資格（日本で登録されている審判員の1%）を、チーム運営に関してはJFAスポーツマネージャーgrade2資格を有している。スポーツ医学や栄養学、トレーニング科学やコーチ学等の専門的教育を受けており、アジア地域でプロフットサルチームの監督ができ（オファーがあれば）、JFAの資金援助を受けてサッカークラブを設立運営することができる。

さらに、筆者は自分のチーム指導の傍ら、公益社団法人栃木県サッカー協会審判委員会の要職に就き、委員会運営はもとより県内の審判育成事業等に携わっている。また一般社団法人関東サッカー協会に所属する現役の派遣審判員として、関東リーグ以下の試合やJリーグのトレーニングマッチのレフェリーを務めている。

こうした「貢献活動」は一見するとサッカー部

の活動とは何の関連もないと思われるかもしれないが、実はそうではない。栃木県・関東地区のサッカー界へのこうした常日頃の協力が認められているからこそ、例えば栃木県で開催された関東信越地区高等専門学校体育大会関東ブロックサッカー競技や関東高専サッカー交流スプリングマッチ開催時に、プログラム作成から会場確保、上級審判員の派遣まで、栃木県サッカー協会が率先して優先的に尽力してくれるという恩恵を得られた。

7. 指導者の責務について

高専の多くは教員を公募する際に求める人材の条件として「高等専門学校の本科及び専攻科の教育・研究・学生指導（課外活動、学寮で生活している学生の指導を含む）・校務・地域貢献に熱心に取り組む意欲があること」をあげている。すなわち「部活動を含めた課外活動に熱心に取り組む」ことは必須の条件として高専教員に求められていると解釈できる。しかし「熱心に」とはどの程度までを表しているのだろうか。

この問いに明確に答えることは難しいが、それでも経験上言えるのは「教員が部活動指導に関わるのであれば、それなりの覚悟をもって、真剣に（熱心に、というよりは真剣に）部員と向き合えないと、人間性教育の部分ではあまり効果がない」ということである。

日本では中等・高等教育機関における部活動指導者を対象とした倫理綱領は今のところ存在しないが、例えば以下の米国州立高校指導者協会（NFHS: National Federation of State High School Association）の倫理綱領³⁾を見れば、指導者には極めて高い人間性や道徳性が求められていることがわかる。1)「指導者は学生選手に多大な影響を与えることを認識すべき」2)「指導者は最高の倫理と道徳的規範の手本となるよう努力すべき」3)「指導者は煙草やアルコール、薬物の乱用防止に積極的に取り組むべき」4)「指導者は選手と接する際はアルコールや煙草は避けるべき」5)「指導者は学校行事を促進し、自分の指導計画との調和を図るべき」6)「指導者は競技規則に熟達し、自分のチームにそれを教えるべき」7)「指導者はスタッフと協力して観客のスポーツマンシップを高めさせるべき」8)「指導者は審判員を尊重し、支援すべきである」9)「指導者は試合の前後に相手指導

者と挨拶を交わし、試合のムードをよくすべき」10)「指導者は学生選手に特別な配慮をかけるような圧力を職員にかけるべきではない」11)「指導者はルールに反する方法で相手校選手の引き抜きをすべきではない」。

また、1999年5月に制定された「アリゾナ・スポーツサミット協定」においても、スポーツ指導に携わる指導者に高い人間性とモラルが求められることが明らかにされている。実際「スポーツ競技に関係する者は皆、スポーツと他者を重んじなければならない。コーチは相手を尊敬する態度を模範的に示さなければならない。さらに、選手たちに、対戦相手や審判に対する悪口、口汚いけんか腰のもの言いや、ののしり、そして大きわざして勝利を祝ったりするような不遜な態度を慎むように求めなければならない」とされ、また「コーチは教育職である。スポーツの身体的、精神的側面の教育のほか、コーチは話したり手本を見せたりして、信頼でき、尊敬でき、責任感があり、公正で、愛情深くそして善良な市民であるよう教え、選手の人格を形成するように努めなければならない」と述べられている⁴⁾。

結局、米国の育成年代の指導者に求められている指導者像は（指導者が教員であろうがなかろうが）「競技の技術的、戦術的スキルの指導者としてだけでなく、選手の倫理観やスポーツ選手としての道徳的価値観と公正なよいふるまいを向上させるのを助け、人格を育成するような指導者」⁵⁾である。この指導者像は、日本の高専で体育系部活動の指導にあっている指導者にも当てはまる、というのが私見である。

8. おわりに

そうはいつても、勝利と育成を同時に追求し、選手に信頼され尊敬されるような指導者になるのは容易なことではない。実際、Jリーグ加盟チーム所属のプロの監督の中にもサッカーを語らせたらすごいが、人を扱えない指導者は実はたくさんいる⁶⁾。

国を代表して戦うナショナルチームにおいてさえ、選手とコーチとの間に確執が生じた例がある。例えば、1999年にアメリカ合衆国で開催された第3回FIFA女子世界選手権「1999 FIFA女子ワールドカップ」において、優勝国アメリカチームにお

ける調査の結果として、選手が大会期間中に感じたストレスの最大の原因に、コーチとのコミュニケーショントラブルがあげられている⁷⁾。

さらに部活動顧問に関する日本特有の問題として、保健体育の教員でないにもかかわらず未経験の体育系部活動の顧問を担当している教員が、高等学校において半数弱の40.9%もいる、という現実もある⁸⁾。

しかしこうした問題点を踏まえてもなお、筆者は高専の教員が部活動（体育系のみならず）を通して学生の人間性教育に携わっていくことが学生自身にもたらすものを大切にしたいと思う。

幸いなことに本校にも筆者と同じ価値観を共有してくれている部活動顧問の教員は少なからず存在する。全国の高専にも、まさに本稿で筆者が論じてきたことを体現している尊敬すべき指導者の先達がいる。こうした人々との協同も踏まえて、人間性教育の一環としての体育系部活動の意味を訴えていくのが今後の筆者の課題である。

謝辞

日頃よりサッカー部の運営にご尽力いただいている前監督の伊澤悟先生（機械工学科）とコーチの山崎明先生（一般科・国語）、マネージャーの鈴木佐暉子さん（3年建築学科）、金子遥香さん（1年電気電子創造工学科）に記して心からの謝意を表したい。

参考文献

- 1) 独立行政法人国立高等専門学校機構小山工業高等専門学校：学校要覧 2017 COLLEGE INFORMATION, p.2 (2017)
- 2) *ibid.*, p.4
- 3) <https://www.nfhs.org/nfhs-for-you/coaches/coaches-code-of-et-hics/>（最終アクセス日：2017年9月26日）
- 4) <http://sports.josephsoninstitute.org/resources-sport/accord/accord-intercollegiate/>（最終アクセス日：2017年9月26日）
- 5) レイナー・マートン（大森俊夫・山田茂監訳）：スポーツ・コーチング学 指導理念からフィジカルトレーニングまで, p.33, 西村書店 (2013)
- 6) 鈴木満：血を繋げる。勝利の本質を知る、アントラーズの真髄, p.104, 幻冬舎 (2017)
- 7) Holt, N.L. & Hogg, J.M.: Perceptions of stress and coping during preparations for the 1999 women's soccer world cup finals. pp.251-271, *The Sports Psychologist*, 16 (2002)
- 8) 佐野誠一：外部指導者導入のメリットと課題, *コーチング・クリニック* 2017年9月号, p.12 (2017)